第39回「東書教育賞」の審査を終えて

審査委員長 **市川 伸一**

2023年度は、コロナ禍もかなり終息し、東書教育賞は小中合わせて125編という多くの応募をいただきました。審査委員長として深く感謝いたします。

学習指導要領の改訂後６年以上経過してやや落ち着いてきたこともあってか、論文のテーマとしては、いっそう広いテーマが取り上げられるようになったことを感じました。各教科に関するテーマはもちろんですが、総合学習、探究学習に関するもの、学校経営に関するものなどさまざまです。

いくつかの例を挙げさせていただきますと、小学校部門で、兵庫県稲美町立加古小学校の吉田博明先生の論文が最優秀賞となりました。タイトルは、「学校の意識改革を通した『チーム担任制』の実現」という、学校経営に関する論文です。副題が「全学年単学級の小規模校での複数学年教科担任・複数担任制の取組」とあります。３年生から６年生において、教科担任制を導入すると同時に、学級担任が毎週変わっていくというシステムを導入したということです。学級担任を１人に固定することにより責任が集中したり、休職者・退職者が出たときに大きな混乱が生じることを避けたいという動機からだったそうです。教師間のコミュニケーションの活性化、業務の精選などの副次的な効果も多く、学校教員がチーム担任として意識をもつようになったというたいへんユニークな試みです。

小学校の奨励賞には、広島県三原市立三原小学校の田中涼子先生の「思いを育む！『三原だるまプラン』による主体的な探究の実現」という論文があります。総合的な学習の時間などでの探究は、本来なら、個々人の設定したテーマを主体的に追究するものですが、いきなりそれを行うのは指導上も無理があります。そこで、三原市の伝統工芸品のだるまになぞらえて、２段階の学習を行います。まずは、「仮の探究課題」として、学年や学級で同一のテーマを設定・探究します。そこで心を揺さぶられた経験から、「真の探究課題」を各自が設定して追究していくというものです。ルーブリックによる評価も活用した優れた実践といえます。

中学校部門では、三重県伊賀市立霊峰中学校の、辻村一将先生の「英語力のギャップを超えて学び合う生徒の育成を目指して」という論文が奨励賞を受賞されています。この実践は、前任校であるジャカルタの日本人学校におけるものです。英語力に関して大きな学力差のあるクラスの中で、英語を通して他教科や生活の内容について交流する課題などを入れて、協働的に学ぶ場面を上手に設定しています。学習指導要領に示された方向性を豊かに充実させるとともに、英語検定試験やパフォーマンスにおいても大きな成

果を残していらっしゃいます。

これらの事例にもありますように、全体としては学習指導要領の示す新しい方向を肉付けするための工夫が模索され、その効果検証まで含めた優れた実践が多く見られました。これからの東書教育賞の指針ともなると思われます。また、お読みになった先生方の今後の実践にもぜひ活かしていただけることを期待する次第です。

ICTに関わる論文の総評

審査委員 **赤堀 侃司**

私は、ICT部門を担当致しました赤堀侃司と申します。それぞれの賞のコメントをさせていただきます。

優秀賞から申し上げますが、小学校部門では、神奈川県の佐野昌美先生です。タイトルは、「プログラミング教育を核にした学校改革と学校ブランディング」ですが、中心は学校改革です。校長先生ですから学校改革をしたいということは分かるのですが、そのためにプログラミング教育を導入したところが、画期的だったのです。何故かというと、校長先生がプログラミングというのは、少し距離が遠いという印象があります。ところが実際やってみますと、プログラミング教育を実践するには、この場合はどうやったらいいのとか、ここはこうやったらいいよというように、教員間で相談しあうのです。つまり教員間のコミュニケーションができてきたのです。教員が互いに相談しあうことで、学校改革の一歩が踏み出せたというところが、私どもの納得性を高めたのです。

同時にそのことが、教員の働き方改革にもつながったのです。月の時間外勤務がこれまで60時間だったのが25時間に削減したという報告も説得性がありました。

さらに私が嬉しかったのは、実はこの実践は5年6ヶ月の記録であり、もうじきこの校長先生は退職されると書かれておりました。つまり、佐野先生の自分史なのです。自分の生き様を語っているのです。その生き様が、私たち審査員に、深く入ってきたので、優秀賞に選ばれました。

それから中学校部門の優秀賞ですが、篠原孝司先生で千葉県の教育委員会にお勤めですが、タイトルが、「生徒と共に考え創造性を育んでいく教育の実践」です。この生徒と共に考えとか、しかも創造性を育むとか、タイトルを見ただけで、ずいぶん難しいテーマだなと私は思いました。ところが内容を読んで驚きました。実は3人の生徒たちの発案がきっかけだったのです。ペットの殺処分について、いろいろな理由はあるとは思いますが、まるでゴミでも捨てるような感覚で、ペットが殺処分されることに対して、義憤を感じ、こ

れをなくさなければという思いから、ICTを使って、パンフレット等を作成して訴えたのです。それが全校生徒の心を打ちました。そして全校集会やら教科の中でもそのテーマで議論をし始めた、つまり学校を動かし始めたということです。やがてその活動は、食品ロスやジェンダーフリーの問題まで広がっていきました。文字どおり、生徒と共に創造性を発揮して、現実に生徒たちが学校を動かすことができたという実践が、私たちに共感を呼びました。すごい実践だという印象が、優秀賞の理由です。

次は、奨励賞に移らせていただきます。小学校部門の奨励賞は、久保田智子先生で兵庫県神戸市の学校にお勤めです。この実践は振り返りカードです。図画工作なので作品を記録して、eポートフォリオ、つまり前の作品からずっと今の作品までを保存して、その変化を見ることができるので、学習効果が高かったという実践です。

次は中学校部門の奨励賞ですが、兵庫県の村上仙瑞先生です。村上先生の実践は、数学の立体図形や平面図形の学習で、マインクラフトを活用しました。マインクラフトは文字どおりクラフトなので、プログラムで建物を造るのですが、自分の好きな建物が自由自在にできます。それを使えば平面図形などの理解が進むのではないかという発想です。あるいは、googleアース等を使えば実際の街の通りなどを数学の図形の学習に対応させることで、効果的な学習ができたという実践です。

本当に今回は、私どもも多くの勉強をさせていただきました。受賞された皆さん、本当におめでとうございました。

審査委員

鹿毛 雅治

受賞された先生方、誠におめでとうございます。審査を担当させていただきました鹿毛雅治と申します。

教師の力量形成のあり方が問われている昨今、ご自身の教育実践についてこのような研究論文としてまとめられるという自主的な研究活動の意義や価値を、審査を通じてしみじみと感じました。あらためて先生方の教職専門職として研鑽を積み重ねていらっしゃるお姿に敬意を表したいと思います。特に、生成AIの出現やオンラインによるテクノロジーの革新的な進化により、学校教育の意義があらためて問われる中、先生方の研究論文は人としての教師と子どもたちが対面のリアルな場で展開される、教育実践のもつ意義を示す貴重な提言だと拝察いたしました。

私からは、三つの入賞論文についてコメントを申し述べたいと存じます。

まず、小学校部門で優秀賞を受賞された八王子市立宇津木台小学校・河村優詞先生の論文についてです。小学校の特別支援学級を対象として、新聞を教材として取り上げた教育実践で、課題に対する負荷を感じさせずに、徐々に学習を深めていく道筋を描き、基礎的なスキルを身につけ、表現力を育むことに成功しています。特に、応用行動分析学の理論を基礎として、楽しい体験を重視し、まずは新聞を紙として扱ったチャンバラや新聞紙を服にするといった遊びの段階から、新聞紙上から写真集めやカタカナを探すゲー

ムをする段階を経て、記事の内容に関心をもってスクラップし、さらにはその内容に関する話し合いをし、最終的には記事づくりをしてそれを発表する段階に至る具体的な学習活動を組織している点は特筆すべきだと感じました。新聞という題材からこのように子どもたちにとって魅力的な単元を構想すること、そして、そこで想定される学習活動からどのような能力の形成が期待できるかを思い描くことの教師としての力量が感じ取れましたし、何より、その実践の過程では子どもたちの実態に応じた柔軟で適切な働きかけがあったに違いありません。河村先生の実践からこのような教師の専門性と、その教育的な意義を積極的に学び取るべきだと思いました。

次に、中学校部門で奨励賞を受賞された豊橋市教育委員会・城所美和先生の論文についてです。必ずしも学校において重視されているとはいえず、子どもたちにとっても関心が向けられていない「がん教育」について、生徒が主体的に学んでいくことを目指した一連の実践の取り組みです。がんが身近で切実な病気であることを学ぶために、当事者の作文や手記を活用したり、調べ学習をするための具体的な手立てを講じたりすることを通じて、生徒たちに問題解決的な学びを促すことに成功しています。特に私が素晴らしいと思ったのは、生徒たちが自身の体験について語り合う中で「安楽死みたいなのでよいのか」といった問いを発し、それについて意見交換するなど、自分ごととして問題意識を深めていったプロセスです。生徒たちは単にがんに関する知識を得るだけでなく、自分ががんとどう向き合うのかといった姿勢や態度をも身につけていきました。主体的な態度の形成は学校教育における大きな目標ですが、それを達成するためはこのような丹念な教材研究と子どもの意欲的な学びを引き出す教師の力量が前提となるということを城所先生の実践論文を通してあらためて再認識しました。

最後に、中学校部門で奨励賞を受賞された宮城県加美町立鳴峰中学校・谷地森愛花先生の論文についてです。社会科に単元内自由進度学習を取り入れることで学習者の自由度を認めるとともに、生徒同士が相互に関わり合いながら対話的に学びを深めていくような単元を構想し、教材パッケージの開発はもとより、座席の配置や掲示物などを工夫されました。それを通して魅力的な教育環境を創り出すとともに、生徒同士の対話を重視しつつ、個別、ペア、グループといった学習形態も生徒自身が選択できるような授業実践を谷地森先生は展開されました。とりわけ、「日本列島になぜ律令国家が誕生したのか」といった「大テーマ」を単元の支柱にすえた探究的な学習が、自由進度学習や対話的な学びと表裏一体の形で展開していったことにより、生徒たちの学びが深まっていったという点が特筆すべきだと感じました。まさに、個別最適な学びと協働的な学びが一体となったすばらしい実践事例であると思います。一斉指導からの転換が長らく叫ばれてきたにもかかわらず、特に社会科では知識の伝達に終始する傾向が続く中、１人１人の違いに応じながら主体的な学びを実現するための創意にあふれた実践であると拝察した次第です。

私からのコメントは以上になります。審査を通して、我が国の先生方の底力を見せつけられたような気持ちになりました。受賞された先生方のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

審査委員

高山 実佐

この度、受賞された先生方、誠におめでとうございます。学校現場での日々のご実践をこのような素晴らしい形でおまとめになり、東書教育賞を受賞されましたこと、心よりお祝い申し上げます。小学生、中学生たちとの充実した学びの場を想像しつつご論文を読ませていただきました。

論文審査に関わりました高山実佐と申します。私より3点の論文につきまして選評と所感を述べたいと存じます。

まず、奨励賞の熊本大学教育学部附属小学校・溝上剛道先生の「入門期における文学的文章『精査・解釈』の学習環境デザイン」についてです。国語科入門期における言葉の学びについて小学1年生を対象にした全8時間の授業でした。オノマトペに注目することにより促音などの言葉の響きを楽しみ、具体的な場面や人物をイメージしている学習者の姿がありました。特にオノマトペを身体感覚や生活経験と結びつけ、イメージの具体化を促す工夫が魅力的です。教室の空間を、椅子のみのコの字型に配置し、中央のスペースを物語世界の空間に見立て、言葉・オノマトペを実際に行動に移す活動の場として設けている点です。この「オノマトペ劇場」では、子どもたちが自由に表現し、板書された言葉と互いの動作や発言を結びつけ、描かれた場面の様子や人物の行動を確かに捉えていました。また、「だるまさんが」「こねてのばして」「おおきなかぶ」の読み聞かせに基づいて動作化し、最後のオリジナル絵本の作成へと進めていく展開が興味・関心を引き出し、子どもたちの「〜したい」思いを生じさせています。教室の場で共同体として、言葉が理解と表現の両面に有効に機能する学習が行われていました。

次は、同じ奨励賞の、大阪府豊中市立第七中学校の内兼久秀美先生がおまとめになった「平和な世界の構築を目指す教科横断的な探究学習」についてです。大阪教育大学附属池田中学校にて3年生全クラス4教科、計26時間で取り組んだ共同研究です。戦争はいけないと理解しているだけの現状を問題にし、「平和」という共通のテーマを設定しています。社会科歴史的分野では、英語科との関連からベトナム戦争が世界に与えた影響を学習し、難民受入れ・被爆国としての責任・世界情勢について学ぶ重要性などまで考察し、政治的分野ではピューリッツァー賞受賞写真などから「平和とは何か」という問いを追究し、平和の定義を考えていました。英語科では「Imagine」「Heal the World」を通して歌詞の意味や作詞者の思い、韻を踏む表現を学習し、平和の定義をもとに歌詞を創作しています。音楽科では「Amazing Grace」の背景やメッセージと旋律との関係を学習した上で、英語科で創作した歌詞に合わせた曲想や旋律を創作しました。そして、総合的な学習の時間でそれぞれの主旋律の披露から曲を完成させ、最後は卒業式での全員合唱などを実施しています。学習者は「平和とは何か」について個人・グループ・クラス・学年全体とともに考察し続け、課題解決への方策や態度を学び、表現や実際の行動へとつなげていました。

最後は、奨励賞の愛知県豊橋市教育委員会・城所美和先生の前任中学校での実践「がんの正しい知識を得て、望ましい生活習慣を送れる子どもの育成」についてです。がんは、生徒にとっても身近な病気であること、がん対策基本法などにより学習指導要領にも記載されたことなどから、テーマとして取り上げた実践でした。掲示資料などによる意識喚起に始まり、がんの診断を

受けた猿渡瞳氏の作文や杉浦貴之氏の手記を読んでの感想の交流、市役所・地域の病院による資料やがん患者サポート団体・がん病院への取材を通しての調査、互いの発表を聴きあってのディスカッションという、ひとり調べとその成果の共有が効果的に展開されていました。2年生はこの保健学習を通して、がんについての知識、予防と生活習慣との関連を知り、さらに健康や命の大切さ、今後の生活でどのようなことに注意して行動するべきか、を考えていました。最後の振り返りで、健康を意識した今後の生活習慣について考察している学習者の姿が印象的でした。

いずれも学習者同士の学び合いを大切にし、テーマに関する理解や思考力・表現力を十分に身につけさせている素晴らしい授業だったと思います。こうした実践論文をもとに、さらに豊かな教育を求めていく学校現場を今後も追究していくことを念じております。

審査委員

武内　清

審査委員の武内です。私の専門は教育社会学で、教育の現象や教育実践を、現代の社会や制度のあり方との関係で考察します。教育の理想から考えるより、教育の根本や現実から考えるという見方をします。また、実証的なデータで、教育実践の効果を検証します。

今回受賞された3人の先生方の教育実践に関して、コメントさせていただきます。

第1に小学校の部門で最優秀賞を受賞された兵庫県加古小学校の吉田博明先生の「学校の意識改革を通した『チーム担任制』の実現」です。

１週間で学級担任が変わるという「チーム担任制」を取っています。学級崩壊もなく、教師の超過勤務も減り、児童の自主性も向上したという効果が報告されています。学級王国といわれる日本の学校の中で、このような思い切った組織変更を施した英断が評価できます。小規模校で、いろいろな工夫をし、教科担任制も取っていることで、実践が成功しているのだと思います。標準規模の学校でもこの方法が可能であれば、学級王国の弊害が除去され、学校改革が進むものと思います。

第2に小学校部門で、奨励賞を受賞された山梨県常永小学校の末木貴大先生の「『即興的な発信力』の向上を目指す小学校外国語科の授業改善」です。

英語が専門でない小学校教師の指導で、生徒が流暢に英語を話すというよりは、たどたどしくても自分の考えを英語で話すということを意識させる実践です。この実践は、外国語教育のあり方を根本から考えさせられます。データでも、生徒の興味、関心、意欲が高まったという効果が、確かめられています。

第3に、中学校部門で、奨励賞を受賞された三重県霊峰中学校の辻村一将先生の「英語力のギャップを超えて学び合う生徒の育成を目指して」です。

ジャカルタの日本人学校での英語教育の実践で、生徒による英語力の差異、英語のどの分野が苦手かの個人差、ペア学習とグループ学習の生徒の選択による行き来、他教科の内容を取り入れた授業など、「個別最適化」と「協働化」をフルに取り入れています。データにより検証もきちんとされています。生徒による英語の差が拡大している日本の学校で十分モデルになる実践だと思います。

この3つの実践で共通しているのは、教育のあ

り方を社会の変化の中で根底から考え、様々な改革や工夫をして、その効果をデータで検証しているもので、他の学校でもモデルにできるものです。受賞に心からお祝いを申し上げます。

審査委員

種村 明頼

受賞された先生方、誠におめでとうございます。審査委員の種村明頼です。

学習指導要領の全面実施から、小学校は4年目、中学校は3年目が過ぎようとしています。「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、カリキュラム・マネジメント、育成を目指す資質・能力、主体的・対話的で深い学び、学習評価の充実・改善、ICTの活用、特別支援教育など、多くの重要な課題を受けて、全国の小学校及び中学校の先生方は創意工夫した実践を積まれています。

今回は、第39回東書教育賞では、優れた実践を積まれている先生方が応募されました。どの論文も現在学校が抱えている課題に対して、児童・生徒や地域等の実態を踏まえ、創意工夫した実践を積まれ成果をあげているものばかりでした。とても有難いことだと思っています。

では、はじめに、提出された論文全体についての講評ですが、多くの論文が学習指導要領の趣旨を踏まえ、カリキュラム・マネジメントや授業改善等の視点を明確にした実践的な研究論文となっていました。そして、その取組が児童・生徒の変容につながるものと確信しました。

次に、八王子市立宇津木台小学校の河村優詞先生、昭和町立常永小学校の末木貴大先生、郡上市立郡南中学校の三島晃陽先生の3つの論文について、講評をさせていただきます。

河村先生の「特別支援学級における新聞教育」の論文についてですが、単元の導入時に、新聞紙で楽しむ活動を通して、新聞紙の活字に対しての抵抗を和らげた後、言語活動の学習に入っていき、児童の意欲をもたせる学習となりました。児童の実態をよく理解し、それに即した単元構成にするだけでなく、1人1人の最適な学習も視野に入れた優れた実践論文だと思いました。

続いて、末木先生の「『即興的な発信力』の向上を目指す小学校外国語科の授業改善」の論文ですが、育成を目指す資質・能力を「即興的な発信力」と明確にし、授業改善を行っています。また、外国語科で大きな課題であるスピーキングに焦点を充て、創意工夫した実践でもあります。特に複数の指導者がいる場合にはルーブリックが必要不可欠となりますが、このこともしっかり押さえてあります。大事な点がしっかり押さえてあるよい論文です。

3人目は、三島先生の「持続可能な社会の創り手の育成を目指した教育課程の改革」の論文ですが、本来はカリキュラム・マネジメントの中にカリキュラム・デザインも入っています。この概念を分けて取り組むことにより、まず、大切な授業改善に焦点を充て、その充実をより一層図るためにカリキュラム・マネジメントの1つの要素である組織マネジメントを取り上げるという意図があると考えます。特に組織マネジメントについては、校内体制はもちろんのこと地域人材や地域資源をよく押さえてあります。特に、地域の実態をよく理解し、そのよさを十分に活用したよい事例の論文だと思います。

以上簡単ですが、私からの講評とさせていただきます。

審査委員
東原 義訓

受賞された先生方、おめでとうございます。

ICTに関係する４点について、感想を述べさせていただきます。

小学校部門で優秀賞に輝かれた佐野昌美先生の論文は、校長が、時代を先取りした明確な方針を掲げ、教員たちがそれを理解し、行動に移すことのできる仕組みを創り出すことの重要性が、感動的に伝わってくるものでした。小学校にとって新たな取り組みであるプログラミング教育を核に据え、外部人材の活用、外部プロジェクトへの参加、研究冊子の作成と配布、動画作成、教員が講師となる研修会など、多くの校長に知ってもらいたい５年余りにわたる素晴らしい校長奮闘記でした。

中学校部門で優秀賞を受賞された篠原孝司先生が大切にされたことは、教職員が授業や行事の在り方を生徒と共に考えて、創造していく場面を、意図的に作ってこられたことです。生徒が見つけた問題、たとえば給食の残菜などの問題を解決していく過程を、個人から学年、全校へと、生徒主体で拡大した優れた実践です。その過程で、他クラスとのチャットによる情報交換、同時共同編集による資料作成など、表現や協働の手段としてICTが、適切・効果的に活用されました。

次は、小学校部門奨励賞の久保田智子先生の実践についてです。ICT利用の振り返りは珍しい実践ではありませんが、久保田先生のアイデアはとても参考になります。制作過程の写真をいつ撮影するのか、児童に判断させたり、振り返りを皆で共有するように習慣づけたり、学びを深める振り返りの在り方を児童がチャットで討論し、そのポイントを構造化するなどです。活動を通して、めあてとの関係や、次に何をするかなどを記述する振り返りへと、児童が自らを導いた点が素晴らしいと感じました。

中学校部門で奨励賞を受賞された村上仙瑞先生は、数学好きになれるような、ICT活用の実践をされました。現実の世界と数学の空間図形の世界をつなぐことのできる課題に、継続的に取り組めるよう工夫し、マインクラフトが活用されました。画面上で空間図形を作って観察したり、プログラミングによって空間図形を描いたり、アート作品を制作するなど活動は、個人の空間的思考を促すだけでなく、生徒同士のコミュニケーションをも高め、授業時間以外にも数学的な課題に取り組む生徒を生み出すことに成功されました。

受賞された先生方、おめでとうございました。

審査委員
藤井 斉亮

審査員の藤井斉亮です。

まず、全体的な印象を述べます。

今年の論文のタイトルには、一昨年・昨年と同様に「コロナ」は出てきません。学校教育現場では、コロナ対策がインフルエンザ対策と同じよ

うに日常化されてきていると感じました。日々の教育実践においては、それなりのご苦労もあると思いますが、それをあえて口にせず、やるべきことはやるという日本の先生方の強さと賢明さをすべての論文から感じ取ることができました。

さて、私は次の３つの論文について講評と感想を述べます。

まず、小学校部門で奨励賞を受賞された広島県三原市立三原小学校・田中涼子先生の「思いを育む！『三原だるまプラン』による主体的な探究の実現」についてです。

具体的には、第５学年の総合的な学習の時間、計50時間の実践報告です。その特徴は、プロジェクト型学習の考えを元に、単元構成を、論文題目にあるように三原市の伝統工芸品である「三原だるま」の形をモチーフに計画し、だるまの顔の部分を「仮の探究課題設定」、胴体部分を「真の探究課題設定」と位置付けています。「仮の探究課題」から「真の探究課題」に変わるところを重視し、探究課題が更新される契機を「ショック」と呼び、「どっきり」「びっくり」そして「がっかり」タイプに分類し、ショックの頻度にも着目しています。「ショック」というネーミングが適切かどうかという意見が審査員から出ましたが、探究活動が飛躍的に展開する契機を指導上重視し、それを意図的に仕組んで教育実践をし、実際にショックが探究活動を推進したことが成果として丁寧に報告されており、審査員から一定の評価を得ました。

次は、同じく奨励賞を受賞した、熊本県熊本大学教育学部附属小学校・溝上剛道先生の「入門期における文学的文章『精査・解釈』の学習環境デザイン」です。１年生の国語、「おおきなかぶ」を中心とした８時間の実践報告です。論文の副題が「オノマトペを介した『表現と理解の相互循環』を核として」となっていて、物語を読んで演じる際に、場面や行動の様子を表すオノマトペを声に出しながら演じる活動を実践しています。このことにより文中の人物、動作を表す言葉と身体感覚、経験等を結び付けながら、イメージの具体化を促そうとしています。事後アンケートや学習活動における発話・行動記録、成果物であるオリジナル絵本の記述から、実践の成果が真摯に記述されており、審査委員から一定の評価を得ています。

最後に、中学校部門で奨励賞を受賞された、大阪府豊中市立第七中学校・内兼久秀美先生の「平和な世界の構築を目指す教科横断的な探究学習」です。この研究は、大阪教育大学附属池田中学校の先生方との共同研究で、実践は附属池田中学校３年生（計143名）に対して行われています。教科横断型の探究学習で、実際には社会科・英語科・音楽科、そして総合的な学習の時間に取り組んだ、総計26時間の実践です。より具体的には、３つの教科の知識を統合し、総合的な学習の時間に平和を願う歌を４人１組で創作するというものです。

創作した歌は学年コンサートや、卒業式でも合唱し、また、台湾の姉妹校の生徒にも披露し、姉妹校の生徒から英語で感想が寄せられています。

教科担任制である中学校において、教科横断的な授業のための調整や各教科等の年間指導計画との関連についても明らかにしてほしいとの声が審査員からありましたが、いわゆる教科の壁を乗り越えて共通テーマを設定し、そのテーマである「平和」の概念が学習の過程で変容していったことが実践の成果として明らかにされており、審査員から一定の評価を得ることができました。

以上、全体の印象と、奨励賞を受賞された３つの論文について所感を述べました。ご紹介した３つの実践は、それぞれの教科・領域等において、全国の模範となる実践・研究であると思います。この度の受賞、誠におめでとうございました。

審査委員

松岡 敬明

この度、東書教育賞の論文審査に当たらせていただきました松岡敬明と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは、今般受賞された皆様、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。ご多用な日々の教育活動の傍ら実践研究を進められ、それを論文にまとめられたご努力に対して敬意を表します。

私からは、小学校部門において最優秀賞を受賞された吉田博明先生、中学校部門において奨励賞を受賞された三島晃陽先生、そして同じく中学校部門において奨励賞を受賞された谷地森愛花先生の論文に触れながら、お話させていただきたいと存じます。

吉田先生は、校長というお立場で「学校の意識改革を通した『チーム担任制』の実現」という論題で研究を進められました。副題に「全学年単学級の小規模校での複数学年教科担任・複数担任制の取組」とあるとおり、大半の小学校が行っている学級担任制を大きく見直し、複数教員による教科及び学級担任制を実践した研究です。学級担任1人に責任が集中しないように学校組織を動かすことが管理職の職務ですが、その点においても果敢な取組と言えます。最大の課題は「校長の覚悟」とご自身が述べられていますが、校長職としての強いリーダーシップがよく伝わってきます。今後、人事異動等がある中で、どのように本取組を継続し充実を図っていくのか、そして保護者の理解をより一層得ていくために、さらに必要なことは何かなどが、今後の課題でしょうか。益々のご活躍をご期待申し上げます。

続いて三島先生の研究についてお話いたします。三島先生も校長というお立場で「持続可能な社会の創り手の育成を目指した教育課程の改革」という論題で研究を進められました。地域の人口減少に伴い、将来の社会の担い手をどのように育成していくかという課題に対して、カリキュラムデザインの観点から取り組んだ研究です。カリキュラムマネジメントの面においても、生徒の育成もさることながら、職員の育成にも寄与している点が印象的です。また、地域コーディネーターの効果的活用や行政への働きかけ及び実効性を伴う施策への橋渡し等、ご自身の行政経験を生かした学校経営と言えましょう。一方、これらの活動を通して、生徒にどのような資質・能力を育成していくのかがより明確に述べられていると、さらに説得力があると思いました。

最後に谷地森先生の研究についてお話いたします。谷地森先生は「中学校歴史分野における単元内自由進度学習の実践」という論題で研究を進められました。筆者は、いわゆる「若手教員」と呼ばれる年代ですが、生徒の実態から自由進度学習の手順を考え、それを授業実践につなげた様子が明確に述べられている点からも、これからの成長が大いに期待されます。本実践を通して、個々の生徒がそれぞれ自分の学びのペースを調整しながら主体的に学習に取り組めるようになったり、授業中に生徒同士の自発的な対話が創出されたりしたことが成果として述べられています。管理職の指導のもと、他教科においても自由進度学習を推進しているとのことですが、学校組織としての取組方や、他教科との比較や関連等についても触れると、さらに全体像が分かるのではないかと思いました。

以上をもちまして、簡単ではありますが私の講評とさせていただきます。